

女性の体を守れ



現場から

=①=

れ、血管を広げる働きのある女性ホルモン「エストロゲン」が閉経で急に減少するため、心臓の細い血管が収縮しやすくなり、痛みが出るとみられる。一般的な狭心症とは



性差に着目した医療の重要性を提唱してきた千葉県立東金病院副院長の天野恵子医師

性差医療

男と違う特性理解を

検査方法も治療薬も異なる。女性はこの病気に詳しい千葉県立東金病院副院長、天野恵子医師(66)の診察を受け、正式に微小血管狭心症と診断された。

「いくつもの病院を回ってたどりついた。病名が分かってほっとした」。処方された薬で症状が治まった女性は振り返る。

天野医師はこのケースについて「女性に狭心症は少ない

という先入観もあり、一般の病院では十分対応してもらえない患者が少なくない」と指摘する。

天野医師が微小血管狭心症を知ったのは昭和60年のこと。当時40代初めだった友人

の症状が狭心症とそっくりなのに薬が効かなかった。米国の学会に出席し、その症状が微小血管狭心症だと知ったという。

米国では当時、新薬の治験

を含む研究対象が男性に集中していたことへの反省から、特に女性の更年期疾患の研究に国を挙げて取り組んでいた。

「高齢化で閉経後の寿命が延びる女性の生活の質を高めるためにも、性差に着目した医療が必要だ」と考えた天野医師は、講演やセミナーで「性差医療」の普及に努め、総合的に女性を診療する女性専門外来の導入を提唱してき

た。

平成13年5月、天野医師の活動に注目した鹿児島大学病院が日本初の女性専門外来を開設し、人気を集めた。同年9月には都道府県立病院として初めて東金病院に設置。堂本暁子・千葉真知事の要請で天野医師が副院長に就任した。以降、女性専門外来を設置する医療機関は増え続け、全国400カ所以上になるという。

「日本の性差医療はまだ3合目。女性の罹患率の高い症例の積み重ねや質の高い医師の確保などやるべきことは多い」。天野医師は「女性のための医療」の先を見据えている。

◇ 8日までの1週間は、女性が健康で充実した生活を送れるよう厚生労働省が定めた「女性の健康週間」。思春期や妊娠・出産期、更年期などライフステージに応じて体の変化が著しい女性の健康を取り巻く現状を報告する。

5年ほど前、当時50代だった会社員の女性は帰宅途中、突然、心臓を圧迫されるような痛みに襲われた。すぐに病院で心電図を取ったが異常はない。しかし、約3カ月後、勤務中に同じ症状が表れた。別の病院で血液検査やCT検査など詳しく調べたが、また「異常なし」と診断された。「気のせいか」と思った矢先、3回目の痛みが……。悩んでいたとき、テレビ番組で自分と同じ症状を紹介していた。病名は「微小血管狭心症」だった。

一般的な狭心症は男性に多いといわれ、心臓に血液を送る冠動脈が動脈硬化で狭くなったり、痙攣したりすることで血流が悪くなり、胸に痛みが生じる。

これに対し、微小血管狭心症は更年期の女性に多いとさ